

コロンブス以前からポリネシアにあったサツマイモ——概観

内林 政夫

Sweet Potato in Pre-Columbian Polynesia——An Overview

Masao UCHIBAYASHI

Retired from Takeda Science Foundation, Juso-honmachi, Yodogawa-ku, Osaka 532-8686, Japan

(Received August 22, 2006; Accepted September 14, 2006)

An overview is presented on the reports available so far on sweet potato, *Ipomoea batatas*, cultivated widely in Polynesia in the pre-Columbian era, with reference to possible ways and presumptive dates of transfer from the Americas to Polynesia, such as (1) Polynesian navigators' travel to Peru, (2) Peruvian fishermen's drift westward, (3) vessel drift, (4) seed drift, (5) root-tuber drift, and (6) transport by birds. The author supports the case (1) as most plausible. *Ganshu* or *Ganchu* described in the old Chinese herbal books is identified as *Dioscorea esculenta*. An introduction of the tuber to China and Japan is briefly mentioned.

Key words——sweet potato; pre-Columbian; Polynesia; *Ipomoea*; *Dioscorea*

プレ・コロンブス時代に新旧両大陸間の交流があったかどうかで常に話題になるサツマイモはメキシコ起源である——田中正武

コロンブスの1492年の新大陸到達のはるか以前に、新大陸原産のサツマイモが太平洋諸島各地で栽培されていて、住民の主要な食糧になっていた。

大航海時代—西洋では発見時代 the Age of Discovery と呼ばれる—が始まって西洋の探検家たちが太平洋の島々にやってきた。1595年マルケサス島、1722年イースター島、1769年タヒチ島、1769年ニュージーランド、1778年ハワイ諸島に現れた彼らは、現地人が広い畑からとれるサツマイモを主食の1つとしていることを知った。現地人たちの主要食糧は、果実植物のココヤシ(ココナッツ)、パンノキ、バナナ、プランテン(料理用バナナ)、根菜植物ではタロ(サトイモ)、ヤム(ヤマノイモ)、ウコン、サツマイモなどであり、サツマイモ以外は、すべてインド・マレーシア地域からポリネシアへ、つまり西から東への到来植物であった。

サツマイモは唯一、東から西へもたらされたものであった。その原産地についてはペルー起源説とメキシコ起源説が争われてきたが、田中正武(京都大

学名誉教授、木原生物学研究所長、故人)によって、サツマイモ(*Ipomoea batatas* Lam., ヒルガオ科、サツマイモ属)の発祥地はメキシコ・グアテマラの地域の可能性が高いとされた。¹⁾ 田中はペルー起源説を退けていう。

メキシコは古くからトウモロコシが出現していて、サツマイモは重要な作物としての位置が与えられず、むしろかなり早くから(恐らく紀元前2000年頃)サツマイモがペルーまで伝播し、その地域ではかなり重要な栽培植物となったと考える方が妥当であろう。(以上からみると)サツマイモは、少なくとも紀元前3000年以前にはメキシコ地域で栽培されたと結論できる。

新大陸起源のサツマイモがなぜ太平洋諸島、ポリネシアで古くから栽培されてきたのか。可能性の選択肢をみてみよう。

- 1 人の手による伝播 ——(1)、(2)意識的、(3)無意識的
- 2 人手を借りない伝播 ——(4)種子、(5)塊根の海流による搬送、(6)種子の鳥類による運搬

これらの選択肢のそれぞれについて、古くから多数の議論がなされてきているが、いまだに意見の一致をみるには至っていない。そこで、こんにち最も支

元武田科学振興財団(〒532-8686 大阪市淀川区十三本町2-17-85)

Present address: 2-10-1 Obe, Kawanishi 666-0014, Japan

持の多いものから順に検討してみよう。

その前に中・南米に対面する位置にあるポリネシアへのモンゴロイド・マライ系人種の移住の経緯について知っておく必要がある。

「ポリネシアの三角形」といわれる地図上の区画が知られている (Fig. 1)。北のハワイ諸島、南東のイースター島、そして南西のニュージーランドを結び囲む三角形をいう。ポリネシア全域を包含する。

民族の移動はしばしば気候の変化・悪化が引き金になって起こる。²⁾ ユーラシア大陸東部では、いまから 5000 年前と 3500 年前 (いずれも象徴的な年代) の 2 回、気候の激しい寒冷化が起こり、大陸北部の住民が南方に移動してきた。そのため南部にいた主としてモンゴロイドの住民たちは圧迫を受けて押し出される形で移動を余儀なくされ、ユーラシア大陸南東部のどこかを離陸出発点として海洋諸島に移動したと考えられている。移動の第一波で 5000 年前に東方に出た者たちはニューギニアにまで達し、第

二波の 3500 年前頃からさらに東に移動してまずフィジー諸島に、さらに 3300—3100 年前にトンガ経由で 3100—3000 年前頃にサモア諸島に到達した。ここで 1300 年間の理由不明の停止期があり、紀元 300 年頃マルケサス (マルキーズ) 諸島に渡ったのち、紀元 400 年頃イースター島、紀元 500 年頃にハワイ諸島、そして南西方向に転じ、ソシエテ (ソサイエティ) 諸島を経て紀元 800 年頃ニュージーランドへと広がったとみられる。²⁾ それぞれの土地での考古遺物の年代測定に現地の伝承などを加味したかなり正確な年代推定とされている (Fig. 1 の実線矢印)。このようにポリネシアに西からの移住があったのは、それほど古いことではなかった。

マライ・ポリネシア語を話す人たちは、海洋を自由に渡り巡る習性を持ち、何千 km もの海洋を彼らの舟、アウトリガー (張り出し腕木)・カヌーやダブル (双胴)・カヌーにクラブクロウ・セイルと呼ばれるカニの爪形の帆を張って、縦横無尽に航海す

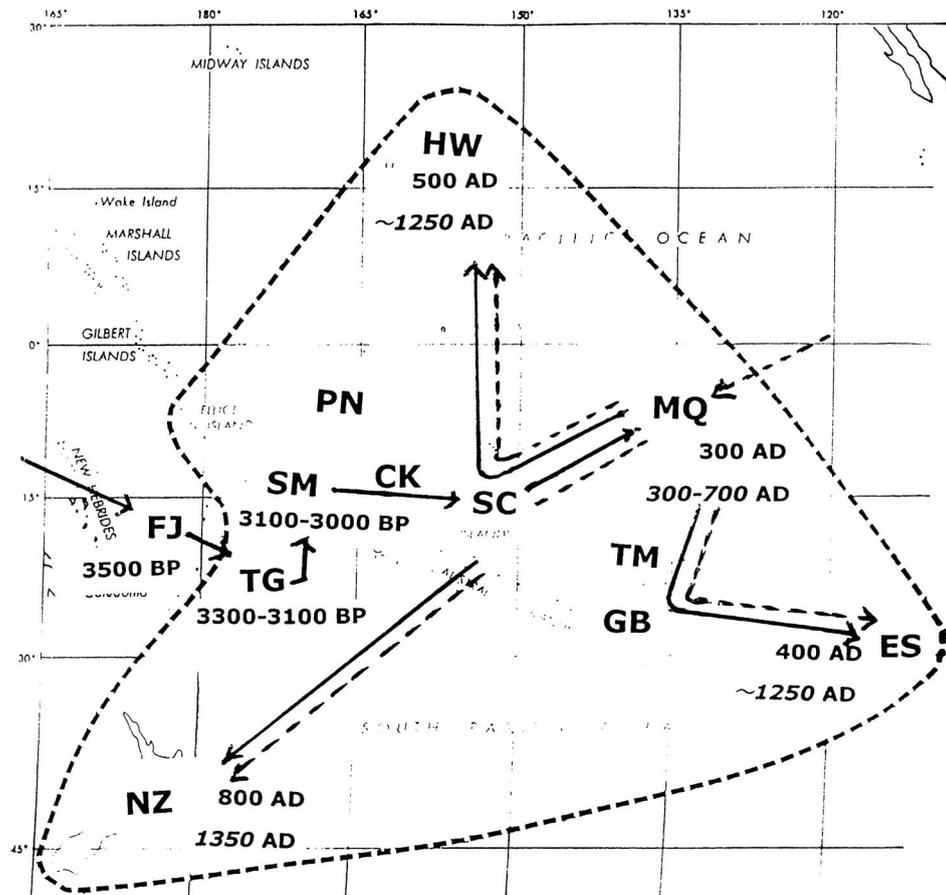


Fig. 1. The Polynesian Triangle with the Presumptive Dates of Immigration and Arrival (in *italics*) of Sweet Potato

AD: anno domini, BP: before the present (1950), CK: Cook Islands (Is.), ES: Easter Island, FJ: Fiji Is., GB: Gambier Is., HW: Hawaiian Is., MQ: Marquesas (Marquesas) Is., PN: Phoenix Is., SC: Society (Societe) Is., SM: Samoa Is., TG: Tonga Is., TM: Tuamotu Is.



Fig. 2. The Borobudur Ship

る術を心得ていた。ポリネシア一帯は東から吹く熱帯東風、貿易風*と、東からの海流が主流である。赤道西風と赤道反流といわれる西からの流れがあるが地域と季節の限られたものである。ポリネシア人の第二波の東への移動は、この東からの流れに逆らうものであった。向い風と逆流であった。したがって、この移動は決して漂流ではなかった。はっきりした意志を持っての行動であったに違いない。

帆船では風上への帆走能力が問題になる。1975年ハワイで行われた双胴カヌーによる航海技術の実験で、³⁾ ポリネシア人のクラブクロー・セイルは、古くから広く使用されてきたラテン・セイルより風上帆走能力が優れており、その縦帆セイルによって、風上に向かって70°の角度で進むことができることが証明された。地理学者の鈴木秀夫はいう。²⁾

東風帯であったからこそ東へ行くことができたという考えがある。東へのパイオニアは、さ

らに東に島があることは知らなかった。70°の角度で苦労してジグザグに東進しても、島がみつからなければ、安心して東風に乗って戻ってくる事ができた。

彼らの航海能力は驚くべきものであったといえよう。

ジャワ島中部のボロブドゥール仏教寺院（750—850年建立）に古代船の彫刻（Fig. 2）⁴⁾が5カ所にある（筆者は現地訪問時には知らなかった）。その彫刻された船の実物は19mの船長であったと推定される。これは単なるカヌーなどでは決してなく、アウトリガーがみえるが、れっきとした2本マストの縦帆船スクナーである。8世紀に既にこのような船がジャワで造られていた。ポリネシア人も恐らくこの域に達していたと考えてよからう。⁴⁾

ちなみに、この彫刻のボロブドゥール古代船を現代型に再現した船で実際の航海が成功している。ジャカルタからインドネシア大統領に見送られて西進し、マダガスカル島を経て南回りで西アフリカ・ガーナに達するルートをも、イギリス人、インドネシア人（女性を含む）など8名のクルーによって2003年8月—2004年2月に行われた。⁴⁾

*[注] 貿易風 trade wind の trade は、常に変ることなく繰り返される行為を意味したもので、この風に乗って貿易・商売をする意味ではない。日本語訳で、それと知らずに、あるいは便宜的に貿易とされた。こんにち英語でも商売風と誤解、理解されている。

また、ダーウィンに先駆けて生物進化の自然選択説を発表したアルフレッド・ウォーレスは 1857 年にバンダ海の東にあるケイ島で、住民が高度の造船技術を持つことに次のように驚嘆している。⁵⁾

積載量 20—30 トンの船を、釘の一本、鉄片のひとつも使わずに、また工具も斧と手斧とねじ錘だけで見事に、速力のある外洋船を造る。ヨーロッパの最高の造船工でもこれほどぴつたりと確実にあわせられないほど上手に板材をあわせている。ナイフの刃が差し込める隙間さえほとんどない。

これがポリネシアでも伝統的な造船技術であったに違いない。そして、こうした船の操船能力がサツマイモをもたらすことになる（後述）。

ポリネシアの各島に定住することになった人たちがサツマイモを手にするのは年代的にみて次のようである。マルケサス諸島では住民定着の紀元 300 年のすぐあと、あるいは紀元 300—700 年頃であったとされる⁶⁾。マルケサスからソシエテ諸島を経てハワイ諸島へ、また、マルケサスからガンビア諸島のマンガレーバ島経由でイースター島へ、ともに遅くとも 1250 年頃に、またニュージーランドへは遅くとも 1350 年頃に入った（Fig. 1 の点線矢印）。ハワイ、ニュージーランドの住民の記録や各地の考古遺物がそれを示している。

わき道に少々それるが、ポリネシアの中で南米大陸に最も近距離—それでも 3000 km 以上離れ—にありながら、サツマイモ伝播劇では主役になれなかったらしいイースター島について付言する。モアイと呼ばれる巨大な石像群を建てたこの島の住民は、東の南米チリ由来とする説と、西からのポリネシア人とする説の間で長らく争われてきた。1994 年にイギリスの研究者たちの「イースター島古代住民からの DNA」と題する研究発表がなされて、住民はポリネシア由来ということで結論がでたようである。⁷⁾ 彼ら研究者は 40 年前に発掘されチリ・サンティアゴ国立博物館に保管されていた古代住民成人 12 体の骨サンプルを用いて DNA の抽出・分析を行い、現代ポリネシア人 DNA、ハワイ、ニュージーランドで既に得られている古代ポリネシア人 DNA、並びに南米人 DNA の各データを比較検討して、イースター島の古代住民はポリネシア系との結論に達した。サンプルのコンタミネーションには

特別の配慮が払われたと記されている。こうしたポリネシア系の住民は 1870 年代に絶滅し、現在の住民約 2000 人はチリ系と他の混血である。

以上の状況のもとにサツマイモの到来の選択肢を紐どいて行くことにする。

(1) ポリネシア人の往復航海：誰か、ある勇敢なポリネシア人（たち）が紀元 300—700 年の頃、カヌー（あるいはスクーター）で大洋を東進してペルー海岸に到達し、現地で得たサツマイモを持ち帰った。これがこんにち最も確からしいとされる説である。

出発地：出発点としてマルケサス諸島、イースター島、ガンビア諸島のマンガレーバ島などが議論されてきたが確証はない。東ポリネシアではマルケサスに最初に住民が入り、そこから海洋性の人たちが各地に散らばったこと（Fig. 1 の実線矢印）、東ポリネシアで最初にサツマイモが到着したのがマルケサスであるらしいことから、南米に向かって出てサツマイモをみつけた人（たち）がまた出発点に戻ってきたと考えて無理がないこと、などからマルケサスが東進の出発地と一応考えることにする。出発者は前途に島、陸地があると分かっていたわけではない。「さらに東へ」というチャレンジ精神にかられたことであつたらう。「駄目なら戻ればよい」と上述の通りである。東にペルー海岸まで障害物なしで 6500 km はある。風と海流をうまく利用できたとして、1 時間 10 キロ、全行程に 4 週間を要することになる。この所要期間は彼らの航海としてはもちこたえられる期間であつたらう。往復して 13000 km の航海に耐えられるだけの強さのカヌーでなければならなかった。

前述のように、東から吹く熱帯東風、東からの南赤道海流に逆らつての東進は彼らにはそれほどの困難ではなかったに違いない。問題は南米チリ・ペルー海岸に沿って北上する強力な寒流、フンボルト海流をどう乗り切るかである。ドイツの科学者・探検家であるアレクサンダー・フォン・フンボルトが 1803 年に調査した海流で、彼にちなんだ名が付く。南極大陸から出た寒流がチリ・ペルー海岸に沿って 80—160 km の中で強い流れとなって北上し、次第に沖に遠ざかって行く。プランクトンを多く含むので、ペルー沿岸はマグロ、カツオをはじめアンチョビー（カタクチイワシ）など多種の魚類の

大漁場となる。数年に1回北の赤道から暖流エルニーニョ海流がペルー沖に南下してきて、その地域の気候に大きな影響を与える。エルニーニョ現象と呼ばれる。⁸⁾

到達地：マルケサスから東進してきたカヌーは、この北上する寒流に乗せられると、はるか北の中米にまで運ばれてしまう。エルニーニョの時季に当たるとさらに混乱する。こうした海流をうまく乗りきってペルー海岸に到達することは容易ではなかったと想像される。1回の試みで成功したか、再度の挑戦であったかもしれない。乗り切れないからこのルートの可能性はないとする説もある。

さて、なぜペルーなのか。ハワイからメキシコへというルート（約 5000 km）もありうる。しかし、上述のようにハワイへのサツマイモの到来はマルケサスからであり、時代的に遅いので、このルートは最初のコンタクトとしては一般的に考慮されていない。

ペルー海岸のリマ地域のケチュア語方言でサツマイモはクマール *kumar, kumal* と呼ばれる。ポリネシア祖語でサツマイモはクマラ *kumala* とされる。^{9,10)} こんにち *kumala, gumala, umala* としてポリネシア各地で知られる。ニュージーランドでサツマイモを主食とするマオリ族はこれを *kumara* と呼ぶ。イースター島でも *kumara* である。こうした言語的関連からペルーのサツマイモがポリネシアに広まったとみられる。

反論もある。¹¹⁾ ケチュア語でサツマイモは通常 *kumar* ではなく *apichu* であるといわれる（古い記録には *aji* ともされている¹⁰⁾）。そして *kumar* はヨーロッパ由来語と言われるが、これは年代的に整合性がない。また別に、¹²⁾ *kumal* がエクワドル、ペルーの沿岸地域で使われている証拠はないという主張がある。そして、*kumala* はポリネシア起源であり、それがスペイン人によって南米アンデス地域にもたらされたと説明する。⁹⁾ こんにち、ペルー、チリ、メキシコでサツマイモは *boniato, batata* 以外に *camote* とも呼ばれる。

ポリネシアの広範な地域（全ヨーロッパの面積にかぶさる）の各地で極めて近似した名称が使われていることから、サツマイモは、サモア諸島に住民が移り住み、各地に分散する前（3000年前）に早くも到来したとみる人がいるが、遅くともマルケサス

諸島から各地に分散して行く前（西暦 300 年）に南米から到来していたとみることができよう。

以上の肯定・否定論を種々勘案して、ポリネシア人が南米に到達したとすれば、その地点はペルーの沿岸地帯と推定することができる。

ペルーにて：ペルーの海岸に上陸したポリネシアの船乗り（たち）が現地住民とどのような接触をしたかは不明である。いえることは、現地人からサツマイモを手に入れて、それをはるばると持ち帰ったということである。では、なぜ現地地で主食ではないサツマイモを取り上げたのか。ペルー人の主食は圧倒的にトウモロコシであり、山地、高地ではジャガイモであった。

ポリネシア人にとって根菜植物のタロイモ（インドシナ半島原産）、ヤムイモ（東南アジアのモンスーン地帯原産）は既に主食としてなじみ深いものであった。トウモロコシは初めて眼にするもので奇異であったに違いない。そういう感覚から、同じ根菜型のサツマイモにより興味を引かれたとしても不思議はない。サツマイモを選択した理由はこのようなことではなかったかと推測する。船は航海中は終始海水をかぶり、積み込んだサツマイモの塊根が腐敗する可能性が高かったとみられる。したがって、相当多量の塊根を最初に乗せていなければ栽培可能な状態のものを持ち帰ることはできなかったと想像される。

帰還：サツマイモを手にしてのペルーからの帰還は、フンボルト海流が難関であったに違いない。1947年に筏を操ってペルーからポリネシアに航海したコン・ティキ号探検¹³⁾では、海岸から約 100 km をタグボートで曳航してもらってから自力航海を開始した。海岸線沿いの海流を乗り切ることの困難さがあったからである。帰還をめざすポリネシア人も、この沿岸海流にてこずったに違いない。しかし、とにかくそれを克服して気流、海流に乗って西進したとしよう。そうすれば恐らく往路より相当早く出発地に帰り着いたであろう。サツマイモの到来の年代的な早さからしても、帰還地、ひいては出発地はマルケサスであったと推定される。

以上が選択肢の第一、最も確からしい説である。

(2) ペルー人の片道航海：ポリネシアの航海者が往復したとする上記の仮説のうちの片道だけを行うこともできよう。つまり、ペルー人が外洋を西進し

てポリネシアにサツマイモをもたらしたというケースである。

上述のコン・ティキ号を主催したノルウェー人ハイエルダールは西進の可能性を主張して自身でそれを実証しようとした。¹³⁾ 彼の主張は（サツマイモとは関係なく）南アメリカ人がイースター島へ移住したというものであった。このイースター島住民の南アメリカからの渡来説は先述の住民 DNA 分析やその他の事象によって否定されることとなった。とはいえ、再現された古代筏による彼の 1947 年の太平洋西進は、古代人の外洋航海を実証したということで壮挙であった。ポリビアのチチカカ湖で今も使用されている葦筏をモデルにしてバルサ材で造った筏で 5 名の同僚とペルーのカヤオを出発した。上述のように曳航船で 100 km の外洋に出、そこから西向き風、西向き海流に乗って西走し、マルケサスとタヒチの中間のトゥアモトゥ諸島のラロイア礁に座礁するまで 6900 km 強を 101 日間で走航した。

さらに 2006 年 4 月—7 月にハイエルダールの孫ら 6 名のノルウェー人によってコン・ティキ号航海の再現が行われた。タンガロア探検と呼ばれる。タンガロアはマウイ族の海の神の名である。今回は改良船に最新機器を搭載して 70 日で達成した。土産にサツマイモを目的地に運んだというエピソードがある。この場合に最初の部分で曳航がなされたかどうかは（本稿執筆時には）速報だけで不明である。¹⁴⁾ 目下、ドキュメンタリー映画の製作中と聞く。

コン・ティキ号の成果にもかかわらず、ペルー人によるサツマイモの伝播説は否定される。ペルー人は近海漁業は盛んに行っていたが、遠洋航海を指向する民族ではなかった。ポリネシア人のようなフロンティア精神は大海に向いては希薄であった。そして、大航海に耐え得る造船技術も持ち合わせなかった。つまり、彼らの力量と装備では強く北向きに流れるフンボルト海流を横切って西方に向かうことはできなかったし、その意欲もなかったろうという結論である。

(3) 船の漂流：意図はなかったとしても漂流の可能性、すなわち近海漁業の間に難破・遭難し西向きに漂流してポリネシアに至ったというケースが皆無とはいえない。

中・南米からポリネシアへのサツマイモの漂流を想定したモデル・シミュレーションの研究がカナダ

から 2005 年に発表されている。¹⁵⁾ 風と海流を関数とする船の漂流と、海流のみの関数の種子漂流についての検討である。まず、船の漂流についてみよう（種子の場合は後述）。

既存のコンピューター・モデルを使用して中・南米の太平洋沿岸各地から西に向かって物体（船）が漂流すると仮想した机上の演習である。結論だけを述べると Table 1 のようにまとめられる。この結果は地理的に近距離の順に到達頻度の高いことを示している。

漂流の場合には、乗員に遠洋航海の準備は恐ろしくなかったであろうから、漂流中に死亡することもありうる。そして、生存者のない舟がポリネシアのどこかに漂着したという想定もできなくはない。そして、島民が漂着船上にサツマイモを発見し、それを栽培したということがありえたかもしれない。この場合は人の介入がないからサツマイモの名称が伝わるはずはなかった。つまり、ペルーからの kumar の名がポリネシアに広まることはありえなかった。このケースには無理がある。

当時、ペルーでは乾燥サツマイモは食糧として利用されていた。しかし、漂着しても栽培することはできない。種子を積んでいたらどうなるかという問題もなくはない。そこで、サツマイモの栽培特性に触れる必要がある。

サツマイモの栽培には通常は芽・茎が用いられる。種芋を苗床に埋めておくと多数の芽がでる。それを育てて長さ 30 cm 位になった茎を切り取り、地中に挿して育てる。成育する食用部の芋は地中で肥大した根、塊根である（ジャガイモは肥大した茎、塊茎である）。サツマイモの果実は球形の蒴果（カプセル状）で直径約 1 cm、中に 1—4 個の黒色の硬い皮の種子が入っている。栽培に普通は種子は利用されないが、硬い皮に切り目を付けるか、皮を少しはがすことで発芽させることはできる。そうした処理なしには発芽に 1 年もかかることがあるとさ

Table 1. Vessed drift

漂着頻度 順位	出発地	漂着地	所要日数 最短/平均
1	チリ北部	イースター	108/155
2	メキシコ北部	ハワイ	122/141
3	チリ北部、ペルー	マルケサス	144/171

れる。¹⁰⁾

カプセル体，ないしは種子が移動させられても手なしに自然に発芽，生育することは難しいということである。

(4) **種子の漂流**：種子が漂流して中・南米からポリネシアに至って発芽したという仮説を考える。サツマイモの果実のカプセルないしは硬い皮をかむった種子が，海流中を長期間，例えば1ヵ月漂流してなお発芽力を失わないという実験的証拠はない。多分，腐朽してしまうであろうという憶測で，この説は反古にされてきている。

先述の漂流シミュレーションの種子の場合をみてみよう。¹⁵⁾ 漂流によって種子が発芽力を失うか否かは考慮外とする。結果は Table 2 のようになる。

(5) **塊根の漂流**：サツマイモの塊根は長期間の漂流には耐えられないと実証されている。腐朽するのでこのケースも没である。漂流シミュレーションは種子の場合と同様である。

(6) **鳥類の運搬**：鳥類が運ぶケースも論じられている。鳥が果実を食べて種子を排泄すると，地面に落ちて発芽するという事例は自然界に多々みられるものである。サツマイモの種子が鳥から排泄されると，硬い皮に筋状の割れ目が入っているという観察がある。発芽を助けるかもしれない。問題は，南米の鳥が何千 km ものノン・ストップ飛行距離を持つかということになり，無理という声が聞かれる。反論もある。アラスカから秋に数千ないし1万 km を飛んで，ハワイを初め南太平洋諸島にやってきて冬を過ごす渡り鳥，ムナグロ *Pluvialis fulva* (チドリ科；コレテ，golden plover) は十分な飛行距離を持っている。ただし，飛翔到達成功率は2割といわれる。¹⁶⁾ ポリネシア人はこの鳥に導かれて島々を巡ったという伝承がある。この鳥はポリネシアと南米沿岸の双方で観察されている。ただ，種子の運搬といった役目は不明である。

種子，あるいはカプセルが鳥の羽毛や爪間に付着して運ばれるケースがあるかもしれない。進化論のダーウィンは海鳥の脚を洗浄して植物の種子52個を得たという話が伝わっている。¹⁹⁾ この場合でも，鳥の飛行距離の方がより大きい問題となる。鳥の媒介説の議論はこれ以上深められていない。

以上のサツマイモ伝播の選択肢の検討から，ポリネシア人の果敢なペルー往復航海がサツマイモをポリネシアにもたらしたとする説が現在大勢を占めている。筆者もこれを支持する。

ポリネシアの広範囲にわたる島々の住民の神話，伝説の調査がなされており，互いの類似が指摘されている。そしてそれらがアメリカ大陸のそこここに伝わるものと関連付けられている。人の関与による伝播を示唆しているが，体系的な研究がないので，本論中ではこれに触れなかった。

コロンブス以前からポリネシアにあったサツマイモの伝播についての概観は以上である。

英語，スペイン語でのサツマイモの名称の混乱について付言する。サツマイモはスペイン人が西インド諸島のハイティ（イスパニオラ）島で住民がバタタ *batata* と呼ぶのを1526年に見聞した。スペイン人はその現地名を持ち帰ってサツマイモを *batata*, *patata* と呼んだ。その後，ジャガイモ（南米で *papa*, *pappas*）がヨーロッパに到来してイギリス，アイルランドに入り，スペイン語の *patata* から英語で *potato* という語が生まれて（文献初出1563年），それが1597年までにジャガイモの名として定着した。こうして，英語ではサツマイモの語源がジャガイモの名称に衣替えした。この衣替えのために誤解をさけて，サツマイモを *sweet potato*, *Spanish potato*, と呼ぶようになった。こんにちスペイン語でジャガイモは *patata*，サツマイモは *boniato*, *batata* である。

中国のサツマイモ：李時珍の『本草綱目』（1590 ママ）には，数品種のサツマイモについて記載されていることから，中国にも古くからサツマイモが栽培されていたという意見がある—と田中²¹⁾はいう。この意見は正しいだろうか。

中国では古くから「薯，署」，「藷，儲」の名の付く植物が知られてきている。『神農本草経』以来，「薯蕷」が本草書にあげられてきた。これは，ナガイモ *Dioscorea opposita* Thunb. (ヤマノイモ科・

Table 2. Seed drift

漂着頻度 順位	出発地	漂着地	所要日数 最短/平均
1	エクアドル北部	マルケサス	150/261
2	同上	フェニックス	270/285
3	同上	トゥアモトゥ	280/325
6	同上 (ペルーなし)	ハワイ (イースターなし)	335/355

属)で、中国原産(中・南部野生)、山薬ともいわれる。それらの記述の中に「藪」が合わせて記載されている。『山海経』(西暦前)に「藪蕒」(署預と同音)があり、その『郭璞注』(300年頃)では、江南人(長江中・下流の南部)はそれを単に「藪」と呼ぶという。『南方草木状』(300年頃)に「甘藪」があり、『本草図経』(1061年)には、江湖閩(長江中・下流、洞庭湖、福建)に「藪、山藪」があるという。そして『大観本草』(1108年)以降の証類本草系はすべて『本草図経』を引用している。こんにちトゲイモ(ハリイモ、トゲドコロ) *Dioscorea esculenta* (Laur.) Burkill と同定される。インドシナ原産で、中国では2世紀頃から栽培されてきた。

中国へのサツマイモ *Ipomoea batatas* Lam. (ヒルガオ科、サツマイモ属)の到来は、メキシコからスペイン人によって1564年以降にフィリピンに運ばれ、それが中国人の手で1594年に福建省に入った。『本草綱目』(1578年)にはサツマイモ到来以前の「甘藪」がある。引用のみで李時珍自身は判断していないが *Dioscorea esculenta* である。『本草綱目拾遺』(1765年)には到来後の「甘藪」がある。甘藪、番藪とも呼び、これまでのいずれの本草書にもまだ記載がないとして *Ipomoea* を指しているが、引用した『甘藪録』(同時代)は *Dioscorea* と *Ipomoea* を同一視している。^{17,18)}

『農政全書』(1638年)は2種類の「藪」があることを認めている。1つ(注:在来品)は山藪と呼び福建や広東・広西に古くからある。もう1つは番藪と名付ける(注:外来品、番は外国を指す)。その到来物語はいう。近年ある者(福建人の陳経綸とか)が海外にあってこれを得た。その地ルソンでは持ち出し禁止であったので、彼は藪の蔓を取り、水汲みに使う縄に編み込んで海を渡って持ち帰ったと。別の説¹⁰⁾としては、福建省で1593年に飢饉が起こり、省の長官がフィリピンに探索隊を派遣して食用植物を求めさせた。その結果、翌1594年にサツマイモが持ち帰られ、ただちに栽培されて主食となった。あるいはまた、福建省で1594年に巡察にきた地方長官に献上して、それから栽培が広がったともいわれる。^{17,18)}

現代中国では、前者トゲイモが甘藪、甜藪、後者サツマイモは番藪とするのが正統であるが、サツマイモはその特徴的な甘味から一般に甘藪と呼ばれ、

また山芋、紅藪、紅苜、白藪、地瓜の名もある。なお、ヤマノイモ属ではダイジョ、大藪 *Dioscorea alata* L. がポリネシアをはじめ熱帯地域で最も広く栽培されている大型のヤマノイモである。^{17,18)}

日本では:日本へは中国から1597年に宮古島に入ったのが最初とされる。カライモ、リュウキュウイモ、サツマイモなどの呼び名は、中国(唐)から琉球、薩摩と移動した経路を示している。日本でサツマイモを甘藪と呼ぶ。蕃藪、蕃藪は異名とされて普通は使われない。(総合文献として Refs. 19—25 をあげた)。

REFERENCES

- 1) Tanaka M., "Saibai-shokubutsu-no-kigen," NHK Books 245, Nippon Hoso Shuppan Kyokai, Tokyo, 1975.
- 2) Suzuki H., "Kiko-no-henka-ga-kotoba-wo-kaeta," NHK Books 607, Nippon Hoso Shuppan Kyokai, Tokyo, 1990.
- 3) ja.wikipedia.org/wiki/polynesia
- 4) <http://www.borobudurshipexpedition.com/>.
- 5) Wallace A. R., "The Malay Archipelago," 1869, Japanese translation by Niizuma A., "Malay Shoto," Chikuma-bunko, Chikuma-shobo, Tokyo, 1993.
- 6) Yen D. E., "B. P. Bishop Museum Bull., 236," Bishop Museum Press, Honolulu, Hawaii, 1974.
- 7) Hagelberg, E. Quevedo, S. Turbon, D. Clegg, J. B. *Nature*, **369**, 25 (1994).
- 8) Suzuki H., "Fuudo-no-kouzou," Daimei-do, Tokyo, 1975.
- 9) O'Brien P., *Am. Anthropol.*, **74**, 342-365 (1972).
- 10) Davidson A., "The Oxford Companion to Food," Oxford University Press, Oxford, 1999.
- 11) Suggs R., "Island Civilization of Polynesia," Mentor, New York, 1960.
- 12) Brand D., The sweet potato—an exercise in methodology, "In Man Across the Sea—The problem of Pre-Columbian Contact," eds. by Riley, C. L. Kelley, C. J. Pennington, C. W. Rands, R. L. University of Texas Press, Austin, Texas, 1971.
- 13) Heyerdahl T., "Kon-Tiki," 1950, Japanese translation by Mizuguchi S., "Kon-Tiki-

- tanken-ki,” Chikuma-bunko, Chikuma-shobo, Tokyo, 1995.
- 14) <http://www.tangaroa.ne; pub.tv2.no/nettavisen/friluftsliv/tangaroa/>.
 - 15) Montenegro, A. Avis, C. Weaver, A. J. “Modelling the Pre-historic Arrival of the Sweet Potato in Polynesia,” (submitted to *Antiquity*). http://www.climate.uvic.ca/people/alvaro/alvaro_papers.html/.
 - 16) <http://www.alohanavi.com/> —Haya’s Hawaii Petit Zukan— kola
 - 17) Kitamura S., “Honzo-no-shokubutsu,” Hoi-kusha, Osaka, 1985.
 - 18) Kitamura S., “Shokubutsu-bunkashi,” Hoi-kusha, Osaka, 1987.
 - 19) Resture J., “Polynesia —The Trail of Plants and Animals,” 2002. http://www.janeresture.com/polynesia_plants/index/htm/
 - 20) McLaughl S., “A Short Prehistory and History of Easter Island—Thor Heyderdahl and the South America Connection,” 2002. <http://www.islandheritage.org/heyderdahl.html/>
 - 21) <http://www.botgard.ucla.edu/html/botany-textbooks/economicbotany/Ipomoea/>
 - 22) <http://www.bbc.co.uk/dna/h2g2/>
 - 23) <http://www.waynesword.palomar.edu/vege1.htm/>
 - 24) Kuchinsky Y., “Sweet Potato Once Again,” 1997. <http://www.andes.missouri.edu/personal/dmartinez/diffusion/msg00323.html/>
 - 25) <http://www.plantanswers.tamu.edu/vegetables/sweetpotato.html/>